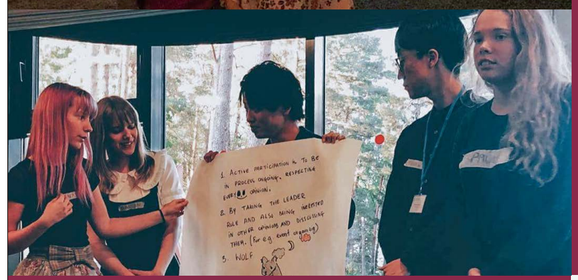


TLC

発行：山口大学
大学教育機構大学教育センター（YU-AP推進室）
〒753-8511 山口県山口市吉田1677-1
TEL.083-933-5261

2020年3月 発行

TEACHING & LEARNING Catalog vol.4

大学教育再生加速プログラム

YAMAGUCHI UNIVERSITY 山口大学

目　次

巻頭言 …… 02

この冊子の構成とインタビュー対象者 …… 03

アクティブ・ラーニングと「深い学び」 …… 03

TEACHING Catalog Part

創成科学研究科 教授
宮田 浩文 先生
「運動健康科学」…… 04

非常勤講師
CHRIST ALAN ROBERT 先生
「英語会話IIa」…… 06

教育学部 准教授
坂東 智子 先生
「文化の継承と創造1」…… 08

非常勤講師
祐村 稔子 先生
「生物学I」…… 10

教育学部 准教授
青木 健 先生
「スポーツ運動実習」…… 12

LEARNING Catalog Part

人文学部4年生　廣本 明日香 さん …… 14
国際総合科学部4年生　増田 雅也 さん　15

巻　頭　言

山口大学 大学教育機構
大学教育センター長
菊政 勲

山口大学は2015年に創基200周年を迎え、新学部の設置や全学的な組織再編を鋭意進めています。なかでも文部科学省大学教育再生加速プログラムの採択（2014年度）を受けて、積極的に大学教育改革に取り組んでいます。山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）では、テーマI「アクティブ・ラーニング」、テーマII「学修成果の可視化」の取り組みを通して、①多様な学生すべてに対する能力育成を最大限支援する、②本学の教育システムを学生および社会に質保証できる、③本事業成果を積極的に情報発信し、我が国の高等教育全体の発展に貢献すること、を目指しています。

特に、テーマI「アクティブ・ラーニング」に関わる取り組みとして、共通教育においてアクティブ・ラーニングの授業実践に顕著な成果をあげられた教員を表彰する「AL（アクティブ・ラーニング）ベストティーチャー表彰制度」が2016年度に制定されました。4年目となる今年度は、5科目6名を選定し、2020年1月7日（火）に表彰式を行いました。受賞者は2018年度の授業実践において、どの程度アクティブ・ラーニング的な活動を取り入れていたか、学生の授業評価アンケートにおける授業満足度・理解度・達成度、授業外学修時間、成績評価分布などの指標をもとに選定されています。

さて、山口大学・大学教育再生加速プログラム（YU-AP）では、表彰にとどまらず、この貴重なALベストティーチャーの授業実践をアクティブ・ラーニングのグッドプラクティスとして蓄積していくことを進めています。また、教員の授業（Teaching）だけでなく、特色ある学生の学修（Learning）の蓄積も進めています。

それらを教員が手に取りやすい冊子にまとめて配布することで、教員のアクティブ・ラーニングの実践に向けたヒントにしていただくとともに、学生の主体的な学びについて改めて議論するきっかけになることを目指しています。

そのための冊子が、この「Teaching & Learning Catalog」です。是非ご一読いただき、今後の授業実践の参考にしていただければ幸いです。合わせて、本学における教育の在り方の議論として、アクティブ・ラーニングの手法論にとどまることなく、学生の「学びの好循環」を実現するための一助になれば望外の喜びです。

この冊子の構成とインタビュー対象者

この冊子は、特色あるアクティブ・ラーニング授業の実践を行った教員を対象としてインタビューをまとめた「Teaching Catalog Part」と、特色ある学びをしている学生を対象としたインタビューをまとめた「Learning Catalog Part」から構成されています。

「Teaching Catalog Part」は、YU-AP事業に関わる教員がインタビュアーとして、ALベストティーチャーを対象に行ったインタビューをまとめたものです。その際、他の教員の授業実践の参考となるよう、**当該実践において特定のアクティブ・ラーニング的活動がどのような目的で取り入れられたのか、実践にあたっての留意点は何か、学生の深い学びをどのように促していたのか**などの観点から、実践の詳細を語っていただきました。

「Learning Catalog Part」は、アクティブ・ラーナーである学生が、大学生活4年間で、どのような学びのヒストリーを経てきたのかを取材し、まとめたものです。

以上のように、本冊子は、YU-AP事業に関わる教員と学生の共同作業によって作り上げられたものです。ご一読のほどよろしくお願いいたします。

2019年度 ALベストティーチャー表彰の様子

2019年度 ALベストティーチャー

区分	授業科目名	所属・職名	氏名
教養コア	運動健康科学	創成科学研究科・教授	宮田 浩文
		国際総合科学部・教授	上田 真寿美
語学（英語、日本語、国際展開科目ほか）	英語会話IIa	非常勤講師	CHRIST ALAN ROBERT
一般教養（ユニバーサル展開科目を含む）	文化の継承と創造1	教育学部・准教授	坂東 智子
理系基礎（講義系）	生物学I	非常勤講師	祐村 稔子
実験・実習	スポーツ運動実習	教育学部・准教授	青木 健

Learning Catalog

所属・学年	氏名
人文学部 4年生	廣本 明日香 さん
国際総合科学部 4年生	増田 雅也 さん

アクティブ・ラーニングと「深い学び」

昨今、アクティブ・ラーニングの必要性が叫ばれていますが、その型を強調するあまり本来アクティブ・ラーニングで目指そうとしていたことが蔑ろになる危険性を指摘する声も増えてきました。

アクティブ・ラーニングは、習得・活用・探究という学習プロセスの中で、問題発見・解決を念頭に置いた**深い学び**によって、必要な資質・能力を総合的に育むという目標を達成するための方法として位置づけられています。しかし、例えばディスカッションをしていればアクティブ・ラーニング、プレゼンテーションをしていればアクティブ・ラーニングというように、学生が深い学びをしているかどうかには関係なく、その型のみでアクティブ・ラーニングとみなされることがしばしばあります。

行動面（外的活動）がアクティブだとしても、頭の中（内的活動）がアクティブでなければ、そのような目標は達成されないでしょう。そこで松下（2015）は、行動面も頭の中もアクティブである、つまり**「深い学び」を促すアクティブ・ラーニングとして、ディープ・アクティブラーニングの必要性を指摘**しています。

この冊子では、松下（2015）を参考に、ALベストティーチャーの実践が学生のどのような「深い学び」を促すようなものだったのかを、「深い学習」「深い理解」「深い関与」といった軸によって捉えようと試みました。

参考文献

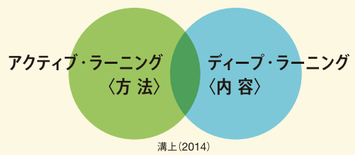
松下佳代・京都大学高等教育研究開発推進センター編（2015）
『ディープ・アクティブラーニング ―大学授業を深化させるために―』 勁草書房

松下佳代（2016）
「アクティブ・ラーニングを深化させる教育カウンセリング ―授業における関係づくりへの貢献を問う―」
日本教育カウンセリング学会 第10回公開講演&シンポジウム発表資料（2016.5.22）

溝上慎一（2014）
『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』 東信堂

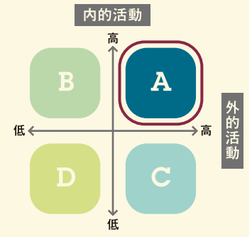
【ディープ・アクティブラーニングの考え方】
松下（2016）より引用

アクティブであると同時にディープでもあること



溝上（2014）

外的活動だけでなく、内的活動でもアクティブであること



01

インタビュイー

宮田 浩文 先生

Hirofumi MIYATA

創成科学研究科 教授

運動健康科学

入学して初めて触れる大学の授業が共通教育であり、
共通教育科目において授業に対する心構えをしっかりと身に付けてほしいと力説される宮田先生。
教養コア科目「運動健康科学」としては、初めての受賞となりました。
「運動健康科学」の授業を通して学生に伝えたいこと、学んでほしいことについて、宮田先生に教えていただきました。

シラバスに基づく授業内容 「運動健康科学」

【概要(共通教育の場合は平易な授業案内)】
近代化に伴う生活様式の省力化・機械化は、運動不足状態を作りだし、その健康への影響が心配されるようになっている。本講義では、運動生理学、バイオメカニクス等の研究成果を、なるべく学生諸君の健康の保持・増進のための実践的な知識となるよう解説する。

【一般目標】
体の基本的構造機能を理解し、それぞれに対する運動や食事の影響を考える。また、どの程度の運動や食事が必要であるかについて、実生活に即して考えられるようにする。

【授業の到達目標】
〈知識・理解の観点〉
- 生活習慣病と運動や食事との関係を説明する。
- 運動に対する適応変化を説明する。

〈思考・判断の観点〉
- 運動の効果を推察できる。

〈関心・意欲の観点〉
- 自分の生活の改善点を見出すことができる。

〈態度の観点〉
- 分かっていないことに関する疑問を具体的に提示することができる。

授業の流れ

基本的に受講生が100〜120人規模の講義ですが、8回授業の2回分の授業では、筋力トレーニング実習と脈拍数を用いた運動強度把握実習を取り入れています。体育館のスペースやマシーンの台数に制限があるため、クラスの半分(50〜60名)は実習(上田真寿美先生が担当)、もう半分は通常通り教室で講義(適度な運動強度に関する実習を一部実施)を受けています。

90分の授業時間のうち、10〜20分程度は学生自身の食生活や運動に関するデータを計測させ、反省の材料としています。例えば、活動量調査や食事調査を行い、自分の運動量や栄養状態に関して把握や反省をしてもらっています。

	項　目	内　容	授業外指示	A※	B	C	D
第4週	1.筋力トレーニング(実習)	1.筋の質、筋力トレーニングの基礎を概説し、生活の中で活用できるようにする。	配付資料の復習	【多】※	【中】	【多】	【少】
第5週	1.脈拍数を用いた運動強度の把握(実習)	1.運動強度と心拍変動の関連を理解させ、健康の維持増進に必要な強度を体感させる。	配付資料の復習	【多】	【中】	【多】	【少】
第6週	1.肥満、理想体重	1.理想体重の算出とその意味について概説する。 2.これまでの内容を総括し、学修ポイントを説明する。	配付資料の復習	【少】	【少】	【少】	【少】

※ A:グループワーク、B:ディスカッション・ディベート、C:フィールドワーク(実験・実習、演習を含む)、D:プレゼンテーション
※【多】:授業時間の50%超、【中】:授業時間の15%〜50%、【少】:授業時間の15%未満

ALポイント
6.5

授業の準備

毎年度、授業で教えるべき内容は、教材ノートに手書きでまとめています。「運動健康科学」の前身の科目である保健体育の講義科目では、担当教員間でバラツキが見られましたが、「運動健康科学」の科目になってからは、運動生理学を中心に、教える内容が整理・統一されたと思います。

心がけていること

今の生活のデータの見直しからスタートし、学生生活そして長い人生を健康で暮らせるための基礎知識であることを認識させたいと思っています。

とにかく、授業で伝えたいことをしっかりと聴いてほしいと思っており、授業前半では、授業態度について繰り返し指導するようにしています。一番強調しているのは、意欲のある学生の邪魔(私語や遅刻)をしてはいけないということです。

授業の工夫と学生の反応

授業の最初に、教える側のポリシーを伝え、学ぶ側のマナーや心構えをしっかりと理解してもらうようにしています。このことで、学生はしっかりとノートテーキングするとともに、実習やデータ測定にも積極的に関与するようになります。

最近の学生は授業態度がよくなっているように思います。「脱ゆとり」世代になって、高校までに学ぶ姿勢が身に付いている感じがします。あるいは、こちらの許容範囲が広くなったのかもしれないと感じることもあります。

必修の授業科目であり、受講生が医学部生や工学部生のため、1年生時に単位修得しなければ留年がちらつくという意識が強いようにも思います。健康的な生活に必要なことを学んでもらうという点で、HOW　TOものの講義だと考えています。

評価の方法

テストはすべて板書から出ることを宣言して、もれなくノートを取るように指導しています。

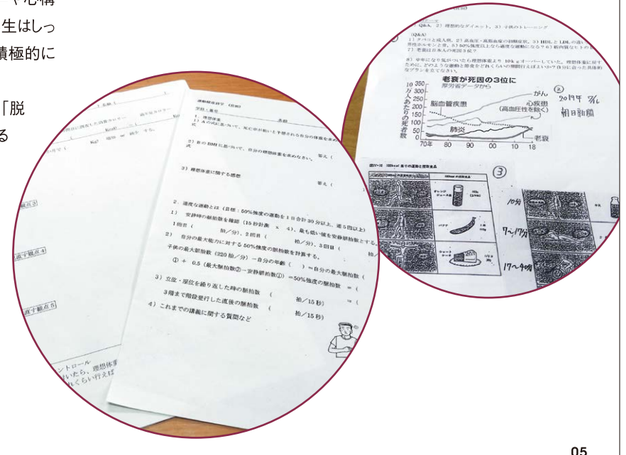
毎時間の小レポートを3点程度で評価、筋力トレーニング実習は10点、合計25点程度で、残りの75点分を期末テストに充てています。

期末テストは、考え方というよりも、基本的な数字・事項を理解し、覚えていることを評価し、あいまいな評価はしないという方針です。

今後の展開

近年、学生からの授業満足度は下がり気味かなと感じていて、授業に対する熱意が少し下がっているかもしれないと反省していました。しかし、今回の受賞を励みに、もう一度「おもしろいだろう」「役に立つだろう」という意識を高めて授業を展開したいと思っています。

運動健康科学は全学必修で約20クラス開講しています。担当教員は違っても内容的には概ね統一されています。教える内容は悪くないと思っていますが、授業担当者が少なくなってきていることなどを鑑みながら、「運動健康科学」の授業で教える内容の大幅な見直しを図る必要性が近い将来来るかもしれないと感じています。



02

インタビュイー

クリスト 先生

Christ Alan Robert

非常勤講師

英語会話Ⅱa

英語系列科目「英語会話Ⅱa」は、授業への学生の主体的な関わりなくして成立しない科目です。教材やワークを駆使しながら、英語をいかに楽しく学んでもらえるか、そんな思いが強く伝わる授業運営をされています。1年生の受講生に混じりながら、授業体験させていただくことを通して、この授業での大事なポイントをクリスト先生に教えていただきました。

シラバスに基づく授業内容 「英語会話Ⅱa」

【概要（共通教育の場合は平易な授業案内）】

英語をコミュニケーションの道具として使う能力を身につけます。この授業は知識より英語で実際に話し、聞いて理解する能力（スピーキング&リスニング）の養成を重視します。また、「英語会話Ⅰ」に比べ、より正確で流ちょうな言語使用を重視します。

【一般目標】

- 「英語会話Ⅰ」の目標に加え、以下のことができる。
- 個人的に関心のある具体的なトピックについて、会話を数分間続けることができる。
- 関係詞を用いて、多様な質問をしたり、知らない語をパラフレーズすることができる。
- 鍵となる重要な情報（When、Where、Who、What、Why、Howなど）に関し、比較的スムーズに英語を使って情報交換することができる。
- 相手の発言に対して、質問したり、コメントを述べたり、相づちなどの反応を行うことができる。

【授業の到達目標】

〈知識・理解の観点〉
- 基本的な語彙・文法的知識を身につける。

〈思考・判断の観点〉
- 授業内の活動に積極的に取り組む。

〈関心・意欲の観点〉
- 間違いを恐れず、積極的に英語を使って意思伝達を行おうとする態度を養う。

〈態度の観点〉
- 最初は嫌いでも英語で発言することが嫌いでなくなる。

〈技能・表現の観点〉
- 個人的に興味や関心のある話題について、様々な質問、あいづち、コメント、パラフレーズなどを用いて比較的正確で流ちょうな英語で会話や情報交換ができる。

授業の流れ

クリスト先生の授業では、教科書の単元に従って、各回の授業が進んでいきます。基本的には、音声教材を聴き取りながら、その答えを前に出て板書してもらい、全体で答え合わせをします。また、途中には、補助教材を使って、ペアワーク形式などを通して、英語会話を楽しく学びます。さらに、セリーヌ・ディオンなどの学生にとって身近なミュージックなどを通して、リスニング能力を高める工夫が施されています。90分が中味が濃く、かつ、常に動きがあり、あっという間に時間が過ぎていきます。

	項　目	内　容	A※	B	C	D
第1週	learning English	本授業の教育方針	【多】※	【中】	—	【少】
第2週	Family and Friends	家族と友人	【多】	【中】	【少】	【少】
第3週	High School Days	高校時代	【多】	【中】	【少】	【少】

※ A：グループワーク、B：ディスカッション・ディベート、C：フィールドワーク（実験・実習、演習を含む）、D：プレゼンテーション
※【多】：授業時間の50%超、【中】：授業時間の15%～50%、【少】：授業時間の15%未満

ALポイント 6.5

授業の準備

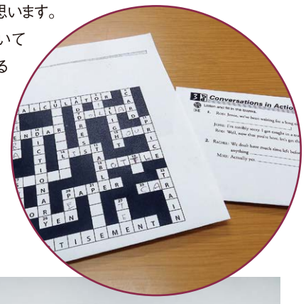
授業では、新しい事項を取り入れ、最新の知識や実践的な手法を使いながら、学んでもらえるよう考えています。学生にとって、楽しく、やりがいがあると感じられれば、授業はうまくいくと考えています。

日本人学生は、英語を長年学んでいますが、英語で会話するということが習慣化しておらず、この授業では、「英語」と「会話」が結びつくように、そして、そのことを自覚できるような機会となるよう準備しています。

心がけていること

私にとって、アクティブ・ラーニングとは、学生に選択肢を与えることだと捉えています。学生は、授業中に、どのように話すかを選び、自分にあった表現を試みると思います。

また、リスニングにおいては、先生の話に耳を傾けることも大事ですが、学生相互の話を自主的に聴き合えることが目標だと思っています。



授業の工夫と学生の反応

学生が授業に満足してくれるということが大事だと思っています。また、学生自身が英語が大切であり、この授業に参加したい、英語会話スキルを上達したいという目的意識を自分で持つことこそ、大事だと思っています。

私は、山口大学と山口県立大学で英語を教えていますが、それぞれの大学の学生ともに特徴があって、好きです。彼らは、今日の日本の若者そのものであり、明るくて、グローバルで、開かれた将来への希望に満ちていると思います。

最近の学生を見ていると、退屈な活動を好まず、やらされ感で行う感じがします。なので、学生の興味を引き出し、インタラクティブに働きかけていくと、英語を出来るだけ使おうとするようになります。

評価の方法

テストでの評価も行いますが、授業での会話やペアワークなどでのコミュニケーションの関わり方を観察して評価するようにしています。

中には、全く英語をしゃべらない学生やアイコンタクトを避ける学生などがいますので、テストのスコアよりも、授業態度や貢献度を大切にしています。

今後の展開

今回のALベストティーチャー表彰受賞について、非常に恐縮していますが、これを契機に、自分の授業が益々より良いものとなるように努力したいです。

自分の授業には、まだまだ欠点があると思っています。例えば、授業中に、ついつい、日本語を使ってしまうことがあり、英語のみを使うようにしなければならないと常々反省しています。

また、受講生の名前をすぐに覚えられなくて弱っていますが、学生にとっては、名前で呼んでもらえることでモチベーションが高まると思いますので、授業全体の満足度が増すように常に努力していきたいと思います。

03

インタビュイー

坂東 智子 先生

Tomoko BANDO

教育学部 准教授

文化の継承と創造 1

一般教養系列科目「文化の継承と創造」という授業コンセプトを見事に体現した坂東先生の授業は、授業設計と教材選びがすごく良く考え抜かれています。現代短歌を身近なものに感じてもらう授業工夫、さらには、短歌の背景にある時代を読み解く、感じ取る内容がしっかりと埋め込まれています。まさに、学生の主体性を引き出す授業を実現しているポイントについて、坂東先生に教えていただきました。

シラバスに基づく授業内容 「文化の継承と創造 1」

【概要（共通教育の場合は平易な授業案内）】

戦後から現代に至る各年代の特徴的な短歌を取り上げ、近代短歌から現代短歌への歴史的変遷を踏まえつつ、近代短歌および現代短歌を鑑賞し、その様相を理解していく。クイズ形式の穴埋め短歌を毎時間行い、それを手掛かりに現代短歌の多様な表現技法を体験的に理解する。講義を通して、スモールステップを踏んで、自作短歌を創作する。また、受講生の短歌を講義中に紹介して、鑑賞するとともに、自作短歌の創作や推敲を行う。現代短歌の様相を体験的に理解し、楽しみながら短歌創作を行う。

【一般目標】

伝統の継承や変容、異文化間の交流、情報化など現代文化の動きを理解することを通して、前世代から学ぶもの、次世代に伝えるものに関して考察する力を養う。

【授業の到達目標】

〈知識・理解の観点〉
- 作品や作者、時代背景について理解する。

〈思考・判断の観点〉
- 作品の特質や問題点を指摘することができる。

〈関心・意欲の観点〉
- 現代短歌への関心をもつことができる。

〈態度の観点〉
- 生涯にわたって短詩型文学に親しむ態度を身につける。

〈技能・表現の観点〉
- 自分の見解を口頭や文章で的確に表現することができる。

授業の流れ

坂東先生が選んだ近現代短歌を年代順に並べかえ、作品の時代背景や短歌史における位置づけ、作品の特質や問題点について考えていきます。また、クイズ形式の穴埋め短歌を毎時間行い、それを手がかりに、現代短歌の多様な表現技法を理解します。さらに、多様な表現技法を自作短歌の創作に生かすことができるように、スモールステップを示して、短歌の創作や推敲を行います。

	項　目	内　容	授業外指示	A※	B	C	D
第1週	オリエンテーション	講義の目標と進め方、シラバスの説明、成績評価の方法短歌と和歌の違い	次時に向けて課題を出すことがある。	—	【中】※	—	—
第2週	昭和20年代までの短歌	斎藤茂吉、窪田空穂、前田夕暮、土屋文明など	同上	—	【中】	【少】	—
第3週	前衛短歌の擡頭	中城ふみ子、石川不二子、寺山修司など	同上	—	【中】	【少】	—

※ A：グループワーク、B：ディスカッション・ディベート、C：フィールドワーク（実験・実習、演習を含む）、D：プレゼンテーション
※【多】：授業時間の50%超、【中】：授業時間の15%～50%、【少】：授業時間の15%未満

ALポイント 4.4

授業の準備

授業において、「授業に参加してもらいたい」「短歌を作ってもらいたい」「背景を知ってほしい」という信念で、授業構成や教材を準備しています。

毎年度、俵万智『考える短歌』、武川忠一『現代短歌の歩み』、『現代短歌鑑賞辞典』などの参考書から新しい題材を探して、教える内容のブラッシュアップをしています。

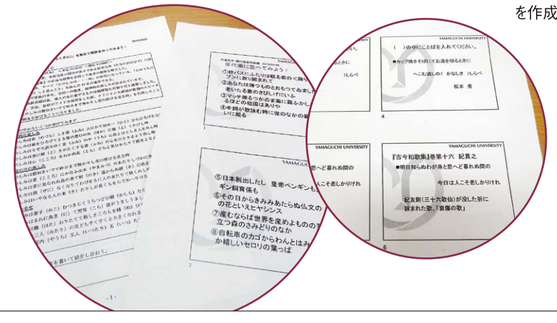
授業では、学生のグループ分けは特に行っていません。隣や前後でのペアワーク、4人程度のグループワークを取り入れるようにしています。

心がけていること

時代順の並び替えや、好きな短歌を学生自身が選び、なぜその短歌がいいと思ったのかを、言語化することから、講義をスタートしています。

その後で、教員から説明、解説を行います。その際、時代背景や和歌から近現代短歌史の流れの中に一首を位置づけることを必ず行っています。

基本的には、個人の作品であっても、歴史的、文化的、社会的背景があって作品が成立していると考えています。全て言語作品は、「引用のモザイク」であるというジュリア・クリスティバの言葉通り、「本歌どり」「本説どり」の歌でなくても、必ず、その作品に影響を与えた先行の作品（短歌以外でも）があり、そこに作者独自の感性や技法が加味されているという理解の仕方を、受講生にも理解してもらえるように心がけています。



授業の工夫と学生の反応

講義の途中で、あるテーマについて手を挙げてもらい、学生の反応を見たり、その反応を踏まえて話し合ってもらったりしています。そうすることで、学生の授業態度は回を追うごとに良くなっていきます。特に、先輩の作品や同じ授業の受講生の感想、作品などにいい刺激を受けて、受講態度が主体的なものに変化していく様子が、教員としてはとても好ましいと感じています。

最初は興味が薄くても、「結構面白い」とか「へーそんな背景があったんだ」といった納得度が増していくのが、感想カード、レポート、テストに表れています。

評価の方法

基本的には、毎回の受講カードを読み、平常点をつけています。また、中間レポートは、提出の有無を第一に、内容は加点という形で評価を行っています。さらに、期末テストは、教科書の中から、興味をもった作者を一人選び近現代短歌史の中に位置づけて論じてもらうという課題を事前に与え、図書館やWEBを活用して事前に調べたものをノート持ち込みを許可して、試験用紙に記入するという形をとっています。この際、授業内容の理解を踏まえた論述になっているかどうかを評価の基準としています。

今後の展開

以前は、自作短歌を作る際のステップをスライドで提示するだけで済ませていましたが、数年前から、受講生の要望を踏まえ、ワークシートを作成してそれをもとに、時間をかけて行うように改善しました。

今後は、授業時間中に、もう少しグループワークを取り入れるようにしたいです。また、共同で短歌を作成する方法や、5・7・5・7・7を受講生がリレー方式で読み上げるといった方法を取り入れてみたいです。

04

インタビュイー

祐村 稔子 先生

Toshiko YUMURA

非常勤講師

生物学Ⅰ

山口大学の非常勤講師として約25年間、生物学を教え続けてきた祐村先生の熱意ある授業が高い評価を得ました。理系基礎の講義系科目としては、初めての受賞となりました。100名を超える大人数クラスにおいて、学生の興味関心を引く授業の工夫について祐村先生に教えていただきました。

シラバスに基づく授業内容 「生物学Ⅰ」

【概要（共通教育の場合は平易な授業案内）】

ヒトを含めすべての生物は「細胞」という共通の基本単位からできています。一方、細胞を構成する部品「細胞小器官」は生体分子の集合体であり、生きものではありません。本講義では、古典的生物学の枠に捕われず、物理学、化学、地球科学を含む自然科学全般の視点から生命を理解する事を目標に、分子から細胞、そして生命がいかに構築され、いかなる原理で機能するかについて分子レベルから解説します。加えて、著しい進歩を遂げつつあるバイオテクノロジーの基礎やさまざまな身近な話題もおりまぜて学習します。

【一般目標】

古典的生物学の枠にとらわれず、物理学、化学、地球科学を含む自然科学全般の知識をもって生命を理解することを目標とします。生体分子から細胞がいかに構築され、いかなる原理で機能し、さまざまな生命現象をささえるかを理解し、加えて、バイオテクノロジーの基礎知識とその現況を学習、考察していただきます。そして、近年の生命科学の著しい進歩において、何が有益で何が危険なのか、科学的根拠に基き自ら判断し将来の応用へとつなげる力を養います。

【授業の到達目標】

〈知識・理解の観点〉
- 生体分子から細胞がいかに構築され、いかなる原理で機能するかについて概ね理解する。

〈思考・判断の観点〉
- 生命科学関連の身近な話題やさまざまな問題点について、科学的に理解し考察できること。

〈関心・意欲の観点〉
- 生命科学関連の身近な話題や諸問題に対して日常的に興味、関心を持ち続ける事。疑問点、不明点は保留せず、自ら調べ、考え、解明すること。

〈態度の観点〉
- 授業中、私語は慎んでください。おしゃべりしたい人は出席されなくて結構です。自力で勉強して下さい。私語の止まない場合は受講を取り消します。

〈技能・表現の観点〉
- 生命科学関連の話題および諸問題について、科学的に理解、考察し、自分自身の考えを的確に表現できること。

〈その他の観点〉
- ヒトも、地球上に生息する多種多様な生物種の中の一種であり、バクテリアからヒトまで、すべての生物は「互いに持ちつ、持たれつ」みな共存関係にあるという感覚を持っていただければと思います。

授業の流れ

祐村先生が担当する生物学Ⅰの授業では、高校での生物学の履修はほぼゼロ、知識が少なく、興味も薄い学生を相手に、生物学の基礎として学ぶべき内容を毎回ラインナップしています。基本的には、教科書『生きもののからくり』（中村・祐村・山本編、2006、培風館）の内容をベースに15回の授業を構成しています。各回の授業は、原則として、前回の振り返り⇒本日の内容（教科書参照）⇒動画やアニメーションなどの補助教材活用⇒個別質疑という流れで進みます。

	項　目	内　容	A※	B	C	D
第1週	生物とは？：あなたもムシも大腸菌も生きている	生物の多様性と共通性、生命の起源：バクテリアからヒトまで	※【少】	【少】	【少】	【少】
第2週	生命の基本単位「細胞」	細胞の構造と機能：真核細胞の細胞小器官	【少】	【少】	【少】	【少】
第3週	生物の成分表：周期律表をながめてみよう	細胞の構成物質	【少】	【少】	【少】	【少】

※ A：グループワーク、B：ディスカッション・ディベート、C：フィールドワーク（実験・実習、演習を含む）、D：プレゼンテーション
※【多】：授業時間の50%超、【中】：授業時間の15%～50%、【少】：授業時間の15%未満

ALポイント 5.9

授業の準備

私なりに信念があります。学生たちの貴重な学びの時間、90分x15回を決して無駄にはさせない、さらに、この講義を受けたことで生命科学一般に強い興味を持つに至り、自ら「ググって」でも、さらに学んでもらえるように授業の準備や資料づくりには、工夫に工夫を重ね、できる限りの努力は惜しまず重ねてはおります。とにかく、基礎知識の積み上げ無しに自然科学の学びは成立しません。そのための講義です。

心がけていること

学生たちにとって、知識の習得が楽しいものでなくては学習効果は薄いと思っています。ですので、講義は面白くなくてはならない。何がどう面白いかが十分に伝わらなくてはならない。何が重要かも、そして必要な知識は明確に伝わらなくてはならない。そして、学生自らが得た知識を応用できなくては意味がない。講義を行う者は、習得すべき内容をそのように伝えなければならない。

授業の工夫と学生の反応

学生の皆さんに限られた講義時間で十二分に学んでもらえる工夫はたくさんあります。生物は動的ですから生きている細胞、生物の動的な姿を実感していただく目的で実験映像、映像教材を見る機会を設けています。工学部生の多数派を占める、生命科学への興味ゼロ状態の皆さんに講義を通して、生命科学って面白いし大事と思ってもらえるように、毎回多量の「読み物」、最新の話題も含め配布し、それに対する一言を宿題ミニレポートとして毎回提出してもらっています。また、理系の学生たちは比較的「英語」が苦手ですが、多くの専門雑誌の論文は読むも書くも英語、学会発表も英語、となるわけで、毎回、講義関連の内容の「英文」も配布して、微力ながら、将来の専門課程へ向けて、いわゆる「理系英語」にも親しんでもらう機会も設けています。

おおむね、講義が進むにつれて、学ぶ意欲が育っていくのが感じられます。工学部の学生の皆さんは、生命科学にはあまり興味がない状況で入学してきています。しかしながら、受験で数学、物理、化学の学習に取り組んできているだけのことはあり、科学全般に興味を持っているし、また幾分込み入った内容も思考し理解を進めることができます。

評価の方法

学生たちに対しては、できる限り公正かつ厳密な成績評価を行うべきだと思っています。もちろん、期末試験で理解度や知識の習熟度を測ることになります。加えて、授業態度、自ら学ぶ姿勢や、熱意、独創性などもできる限り正確に評価に加えなければいけないと思っています。

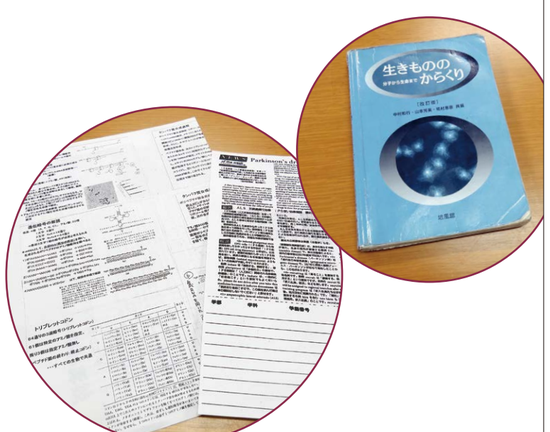
受講生も多く、かつ、教えなければならない内容はてんこ盛りなので、リアルタイムで個々の学生の平常点を正確に評価することは困難です。よって、毎回宿題として、ミニレポートを提出してもらい、採点し成績に加味しています。

今後の展開

生物学、生命科学は現在進行形で、伸び盛り、育ち盛りの分野なので、毎年新しい内容が加わります。

生物学、生命科学の知識は年齢が増すごとに、その意味が分かってくるので、大切なことをもっとしっかりと教えていきたいと思います。

大人数クラス全体をしっかりと把握することは難しく、さらに授業の充実を図っていきたいと思います。



05

インタビュイー

青木 健 先生

Ken AOKI

教育学部 准教授

スポーツ運動実習

実験・実習分野では、授業科目「スポーツ運動実習」から初受賞です。
教員免許取得希望者向け科目であり、小学校体育で必修となっている「ベースボール型ゲーム」を体験する実技科目です。
ソフトボールの基本的動作習得やゲームを通した集団的技能理解は、まさに、アクティブ・ラーニングの極みです。
そんな運動実技科目の大事な視点や教育的指導における工夫について、青木先生に教えていただきました。

シラバスに基づく授業内容 「スポーツ運動実習」

【概要（共通教育の場合は平易な授業案内）】

この授業ではソフトボール等のベースボール型ゲームをあまり実践（経験）したことのない者を対象の主体とし、ソフトボールだけでなくバドミントンやドッジボール等を行うことで適切な各基本動作や技術の習得を第一の目標として授業を進める．授業の後半では習得した動作や技術を基に、様々なルールによるゲームも用いた授業を展開していく．また授業のなかで、これまで受けた学校体育を振り返るとともに、固定概念にとらわれない柔軟な発想に基づく運動方法を紹介していく。

【一般目標】

「投げる」・「打つ」などのソフトボールに関わる基本動作技術について、他のスポーツ（バドミントン等のラケットスポーツ）における動作との比較をすることで人間の各身体動作の仕組みを考えながら学修する．さらに習得した技術や方法を、柔軟な思考をもって教育の現場で実践活用できる説明能力の向上を目指す。

【授業の到達目標】

〈知識・理解の観点〉
- 身体の各部分の名前や役割について理解できる。
- コーディネーション運動や体幹トレーニングの内容について説明できる。
- ソフトボールの基本的なゲームの進め方およびルールが説明できる。

〈思考・判断の観点〉
- 身体の各部分への意識を高めることで、動きの違いを実感できる。
- これまで実施したことのない身体動作について意識することができる。

〈関心・意欲の観点〉
- 固定概念にとらわれない柔軟な思考を持って技能の向上を目指すことができる。
- 自己ならびにチームメイトの課題を解決するための練習法発見に意欲を示し、技能の向上を目指すことができる。

〈態度の観点〉
- 技能の向上にむけて、授業に関わる時間を通じて積極的に取り組むことができる。
- グループやチームの中で、相互的に指導しあえる。

〈技能・表現の観点〉
- ミニゲームや関連した遊び運動において積極的に身体を動かすことができる。
- 各動作について、実践の場で的確に動かすことができる。
- ルールや審判法を理解したうえで、ゲームができる。

〈技能・表現の観点〉
- 常に安全な状況を確認したうえで、実施することができる。

ALポイント 8.1

授業の流れ

種目選択時（第1回目授業時）に、これまでソフトボールや野球の未経験者やどちらかというと不得意という者への指導を中心にした授業展開をすることをアナウンスしています。そのような中で、「投げる」や「打つ」の基本的技術を向上させながら、ルールを理解してゲームを実施できるようになれることを目標にしています。実際の実習開始時（2回目）と終盤（13回目あたり）に自分のスマートフォンを使用して自身の「投げる」と「打つ」のフォームを撮影し、その変容について考察をしてもらっています。また技術的な身体の仕組みを理解してもらうために、授業の中で他の種目（ドッジボールやバドミントン等）も行っています。

	項　目	内　容	A※	B	C	D
第10週	集団的技能を理解する（1）	簡易ゲームを行うなかで、攻撃側および守備側においてそれぞれ必要なルールを理解するとともに実践する。	【多】※	【中】	【多】	【少】
第11週	集団的技能を理解する（2）	特別ルールによるゲームを行うなかで、ベースボール型スポーツの特性を体感する。	【多】	【中】	【多】	【少】
第12週	集団的技能の習得・上達（1）	実際にゲームを行ううえでチームとして必要なプレイ（動きや技術）に慣れるなかで、各技術の上達をはかる。	【多】	【多】	【多】	【少】

※ A：グループワーク、B：ディスカッション・ディベート、C：フィールドワーク（実験・実習、演習を含む）、D：プレゼンテーション
※【多】：授業時間の50%超、【中】：授業時間の15%～50%、【少】：授業時間の15%未満

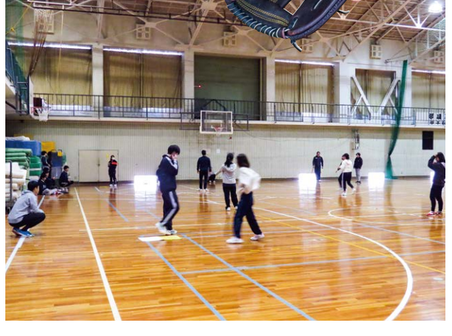
授業の準備

授業の統括、安全管理や受講生への全体的な指導については、教員とSA（翌年度より学校教員に採用が決まっている学生）で行っています。一方、多くの技術練習や簡易ゲーム等については、毎回グループに分け、その中でソフトボールや野球経験者が他の受講生に教えてあげながら活動することを勧めています。

その中で、特に未経験者の受講生に対しては、変容が大きい分、向上したポイントやうまくいっていないポイントについて、細かなことでも積極的に声かけをしています。

心がけていること

スポーツの基本技術については、授業者が何も教えずにすべて自分で学びとってもらうことは難しいように思います。ただし大学生ということで、これまでに経験してきた他のスポーツ種目での動きで近いものを探して提示してあげたりすることで、受講生自身が頭と身体の両方で理解してくれるように心がけています。また受講生同士で教え合うことで、改めて自分の考え（動き）をしっかり言語化できるようになる機会をつぶさないように気をつけています。



授業の工夫と学生の反応

後期1コマの多くはグラウンドでの授業ということで、特に後半は寒い時期にあたりますが、皆さん熱心に受講してくれています。

これまで学校での体育があまり好きではなかったという気持ちの受講生もいるようですが、この授業を通して身体を動かすことが、気持ちいい・楽しいなど、今後の長い人生の中でスポーツを観たり・したりすることについて、ポジティブな気持ちを持ってもらえていることはうれしいかぎりです。

中学・高校では男女別に体育の授業を展開している学校もあり、男女が一緒かつ、いろいろな学部の受講生がいる中で、ある意味、新鮮さを感じながらしっかり取り組んでくれていると思います。

グループ（チーム）も定期的に変えたりしていますが、受講生同士で積極的にコミュニケーションをとって、ゲーム中は良く声も出してくれています。

評価の方法

授業全体の成績評価について、授業への参加度や態度など総合的に評価をしています。

レポート課題として、「①基本的な動作の変容に関する画像比較を通した考察をまとめてもらうこと」、学生生活において運動実技がこれで最後の学生も多いので、「②今後、運動についてどのように向き合っていくかについてまとめてもらうこと」を課して、評価しています。経験者については、動作の変容はあまり大きくないため、教員免許取得希望者として他者にどのように関われているか等の観点を重視して、評価を行っています。

今後の展開

受講生がもっと上手くできるようになれる点は、沢山あると思います。毎年、取り組み方もいろいろな活動を参考に変更していますが、ゴールはない感じです。

授業の内容については、毎年変更している部分はあります。限られた時間の中で、より効果的なプログラムがあれば、その点は積極的に変更しています。

01

廣本 明日香 さん

Asuka HIROMOTO

人文学部4年生

私の大学生活でのポリシー

高校までとは違い、自分の意志さえあればあらゆる経験ができる大学生という期間を思う存分に活かしたいという気持ちがありました。

印象に残った授業、私を変えた地域体験

大学4年間で印象に残っているのは、私の地元である大殿地区をフィールドとして行われた授業です。地域ガイドの方とまちをまわったり、地域の方と議題について話し合ったりする中で、今まで知ることのなかったまちの歴史やおしゃれなお店、人の魅力をたくさん発見できました。

また、この授業をきっかけに大殿地区のイベント（「アートふる山口」）やお祭り（七夕ちょうちんまつり」）での企画を依頼され実施しました。イベントでは歴史民俗資料館の方やイベント実行委員の方々と私たち大学生とで何度も話し合いを重ねて準備を進めていきました。多くの人が関わるイベントの企画を中心となって仕切っていかなければならず、企画の内容そのものであったり、段取りであったりで苦戦することもありました。それでも多くの支えに助けられながら成し遂げることができました。これほどたくさんの大人に支えられて自分たちのしたいことをやらせてもらえる機会はそう与えられるものではないと感じています。地域の方々は私たち大学生の意見を肯定的に受け止めてくださり、いつでも地域の方から率先して手を貸してくださりました。その温かさをとても感謝しています。イベントやお祭り当日は想像を上回る盛況ぶりをみせました。自分たちがやったという実感があるからこそ達成感や充実感はとびきりで、今振り返ると四苦八苦しながら奮闘していた日々も青春のようにキラキラした思い出です。

こうした経験を通じて、私は自分の手で何かを作りあげ、人に届ける仕事をしたいと考えるようになりました。

後輩へのメッセージ

後輩には授業や活動を通じて様々な経験ができること、私のように将来の方向性にも関わるような出会いがあるかもしれないことを胸に留め、積極的に色々なことに挑戦していってほしいです。一つ一つの縁を大切にしていってほしいと思います。

大学での学びを社会人として活かしたい！

私は大学4年間で大殿地区だけでなく、様々な地域や学校の方々と関わることができました。そうした方々とのお話では、その都度に発見があり、その一つひとつが刺激的で、自分の知見を広げ、想像の幅を増やしてくれました。すべてが糧になったと思っています。4年間で学んだものすべてを今後へとつなげ活かしていきたいと思います。

02

増田 雅也 さん

Masaya MASUDA

国際総合科学部4年生

青年よ、世界を感じろ！

私にとって大学で過ごしたこの4年間は、夢に向かって一歩を踏み出すための準備期間でした。

大学の4年間は、怠惰に過ごすには長く、何かを成し遂げるためには短すぎる時間です。この時間をどのように過ごすかは、人それぞれ三者三様でしょう。私の場合は、ただ自分のやりたいことに気付くだけで4年間が終わってしまいました。しかし、悔いはありません。反省は山ほどありますが、凡人である私にとって、この4年間のチャレンジと失敗は全て自分のやりたいことを決めるために必要なものでした。

僕のチャレンジから気づいた“自分に足りないもの”

学生生活でのチャレンジの一つとして、「内閣府国際社会青年育成事業」があります。この事業は、日本と他国の青年との交流を通じて青年相互の有効と理解を促進させるものです。私は、日本人青年10名とともにラトビア共和国へ派遣されました。3週間ほど派遣され、多くの経験を得ましたが、その中でも特に印象深いのは現地の大学生とのディスカッションです。ディスカッションでは、現地の学生10名と3泊4日を共にし、ずっと議論をしました。外国の同年代と真剣な話をして見えてきたのは、自分の専門性の不足でした。英語を喋ることは世界では当たり前で、日本でリーダーシップを発揮していても、世界では通用しないことを知ります。このディスカッションから、何かしら自分の誇れる武器を持っていないと、世界どころか日本でも自分の価値を人に提案できないと考えるようになりました。

僕のチャレンジから得た”評価と自信“

もう一つのチャレンジは、「Share KASA」です。私と友人の二人で、「山口大学おもしろプロジェクト」に応募したプロジェクトです。2019年7月には、このプロジェクトで学長賞をいただきました。

「Share KASA」は、傘の借りパクを防ぎ、自転車通学が多い山口大学で毎回傘を持ち歩くストレスをなくすためのサービスです。学内の至るところにレンタル傘と傘立てを設置し、どこの傘立てでもレンタル傘を返却できるサービスを作りました。ラトビアから帰り、自分の専門性について悩んでいた私は、国際総合科学部で必修化されている「デザイン科学」に目をつけました。特に、「サービスデザイン」という分野に絞って勉強し、その実践のために友人と作ったのが「Share KASA」でした。当時の私にとっては全力を尽くし、努力を評価された最初のプロダクトでした。全力を尽くしたという事実と評価を得た自信が「何か人のためにサービスを作りたい」「サービスの質を向上させたい」という今の私のモチベーションにつながっています。

後輩へのメッセージ

いっぱいチャレンジをして、いっぱい失敗してみてください。　社会に一度出ると、責任や評価など様々な負荷を背負って生きていかなければなりません。自分の身一つで世界に触れ、感じることができる期間は、人生長しといえども大学生の間だけです。自分の見えてる範囲だけで一生を終えるのは、とてももったいないです。皆さんが知らない世界をいっぱい知って、豊かな学びを得ることができるよう陰ながら応援しています。